

## 日本作家クラブ70周年

### 胡堂ら創設者の思い受け継ぐ

作家を中心に幅広い分野の表現者が集う日本作家クラブが設立70周年を迎えた。初代理事長には「銭形平次」シリーズの著者、野村胡堂が就き、設立当初の会員には江戸川乱歩、海音寺潮五郎、長谷川伸、吉川英治ら文豪が名を連ねた。そうした発足時の歴史を掘り起こす動きが現在の会員の間で出ている。

前身の「捕物作家クラブ」は「純文学至上主義とは一線を画す」団体として1949年7月に誕生した。第2次世界大戦中に発表された作品が否定されたり、いわゆる「戦犯作家」として非難されたりした作家も少なくなかった。同会理事の作家、高橋克典氏は「世の中の価値観を一転させた『敗戦』は大衆文学の担い手たちにとっても大きな意味を持った。筆をおったり下野したりした作家もいた状況で再集結するきっかけとなったのは（戦争の一つの区切りとなった）東京裁判の終結だろう」と話す。東京裁判の閉廷が48年11月、そこから約半年かけて足早に会が立ち上がったとみる。

同会の原点ともいえるべき記念碑が浅草寺（東京・台東）境内にある。捕物小説の先駆けとなった作家、岡本綺堂を顕彰するために会発足の4カ月後に建てられた「半七塚」という碑だ。碑名は綺堂の代表作「半七捕物帳」に由来する。高橋氏は「浅草寺への請願から自然石の手配、予算集めまでをたった4カ月でできたとは考えにくい。会設立以前に、胡堂を中心として表現の場を取り戻したいという大衆文学の担い手の切実な思いがあったのではないか」と推測する。

半七塚には「半七は生きてゐる 江戸風物詩の中に……」と碑文が刻まれている。綺堂はコナン・ドイルの「シャーロック・ホームズ」の舞台を江戸の下町に移して「半七」を生み出した。戦後、焼け野原になった東京を眼前に、綺堂が描いた江戸の風情に思いをはせた当時の会員の姿がしのばれる。

2013年から主催する「野村胡堂文学賞」では江戸時代の空気を映し出す歴史小説を多く表彰してきた。第7回の今年は、江戸の謎の天才絵師を描いた木下昌輝『絵金、闇を塗る』（集英社）が受賞。会員の間では会の歴史を振り返る機運が高まる。関連書籍の刊行も検討中だ。その作業は戦後に大衆文学が復活した原点、戦争に与した大衆文学の性質を考えるヒントになるだろう。（村上由樹）